



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	『鼻』・身体との出会い
Author(s)	夢沼, 正美
Citation	国語国文研究, 115, 28-43
Issue Date	2000-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/94679
Type	journal article
File Information	kokugokokubunkenkyu_115_28-43.pdf



『鼻』・身体との出会い

蓼 沼 正 美

*

日本文学の中で、印象に残る幾つかの鼻がある。例えば『源氏物語』末摘花の赤鼻であり、『江戸生艶氣樺焼』の艶二郎鼻であり、あるいは『今昔物語集』巻二十八「池尾禪珍内供鼻語第二十」^{註1}の、長さ「五六寸計」で「額ヨリモ下テナム見エケリ。色ハ赤ク紫色ニシテ、大柑子ノ皮ノ様ニシテ、ツブ立テソ黠タリケル」という禪珍内供^{註2}の鼻。そしてその鼻を「一般に著聞する」ことになった、芥川龍之介の『鼻』に登場する「長さは五六寸あつて、上唇の上から顎^{註3}の下まで下つてゐる。形は元も同じやうに太い。云はゞ細長い腸詰めのやうな」禪智内供の鼻である。

しかし芥川の『鼻』に描かれた鼻は、どうやら他の鼻とは違いがあるようだ。それというのも、末摘花の赤鼻であれ艶二郎の獅子鼻であれ、あるいは禪珍内供の長鼻であれ、それらは我々にとってあくまで他者の身体の問題であつて、我々の鼻と交換可能な鼻として読まれては来なかつた。それに対し禪智内供の鼻は、例えば、「肥大

化した自意識の象徴として内供の顔の真ん中にある」というように捉えられて来た。そうである以上その鼻は、同じ難問を抱えて生きるとされる我々の「顔の真ん中に」も、やはりぶら下がっているということになる。

『鼻』の原^{註4}・鼻^{註5}である『今昔物語集』との関係が論じられる場合も、当然のようにその視点が中心となる。

確かに身辺での出来事に取材を限定したそれらの小説（自然主義派の作家の作品を言う・蓼沼註）に対し、『今昔物語集』（巻第二十八第二十「池尾禪珍内供鼻語」）や『宇治拾遺物語』（「宇治拾遺物語」巻第二第七「鼻長き僧の事」）に取材したこの小説には、新しさがあつた。近代人の心理、否もつと掘り下げた言い方をするなら、自らの実生活上の切実な主題を描くのに、材料（素材）を中世の説話に求めるという方法は、芥川龍之介ならではのことであつた。それゆえ「鼻」に関して、「単なる歴史小説の仲間入りさせられてはたまらない」とのコメントを「編輯後」に「鼻」

掲載の第四次『新思潮』創刊号)に書きつけ、己の開拓した分野への自信のほどを示してもいる。現実の切実な思いは、古典に衣裳を借りることによって、より客観視され、作品内に昇華したのである。

(関口安義「他人の目からの解放——『鼻』——」^{註5})

こうした指摘からも分かるように、「衣裳」としての禅珍内供の長鼻と、「近代人の心理」や「実生活上の切実な主題」が「昇華した」禅智内供の長鼻と、前者は『鼻』の「新しさ」ではあっても、それがこのテクストを、近代文学史の中に位置付けるためには十分とは言えない。我々が『鼻』を、そのようなテクストとして認知してきたのは、あくまで後者が理由である。確かに『鼻』には、「自尊心」やら「傍観者の利己主義」といった近代文学のテーマや、その研究・批評のためのキー・ワードとも言えるような言説が、むしろあけすけに語られている。あるいは作者である芥川龍之介自身が、「自分は半年ばかり前から悪くこだわった恋愛問題の影響で独りになると気が沈んだから、その反対になる可く現状と懸け離れた、なる可く愉快な小説が書きたかった。そこでとりあえず先、今昔物語から材料を取って、この二つの短篇(『羅生門』と『鼻』・夢沼註)を書いた」(『あの頃の自分の事』大正8・1)と、「自らの実生活」との関連を語っている点からも、『鼻』はまぎれもない近代文学のテクストとして読まれて来たし、芥川も近代の小説家として捉えられて来た。いや、もしも芥川がそのような意味でこのテクストを、「単なる歴史小説の仲間入りをさせられてはたまらない」(『新思潮』創刊号「編輯

後に」・大正5・2)と言っていたとするならば、関口の指摘には、作家とその研究者とが共犯的に作り上げていく近代文学の枠組みの姿が、典型的に示されているとも言える。

とは言えこのテクストを、近代のそれとして成り立たせているのは、そうした「近代人の心理」や「実生活上の切実な主題」だけなのであるうか。むしろそれを前提としてしまった時、どんなに夥しい『鼻』論が展開されようと、結局は暗い鼻/明るい鼻という二項対立的な主題性の中に、テクストも我々も閉塞していかざるを得ないのではないか。何より鼻とは、我々にとって精神としての対象である以上に、身体的な現象である。にも拘らずこれまで『鼻』は、近代文学のテクストとしてほとんどの場合、その精神性についてのみ語られてきた。それはまさに近代そのものが、身体を抑圧して来たということに他ならず、そうした抑圧からこのテクストを解放すること、我々は改めて近代における身体の問題を考え直してみることが出来るのであり、それもまた『鼻』の語る「新しさ」なのである。

*

『今昔物語集』に登場する禅珍内供は、その長鼻を決して短くしようとはしなかった。

其レガ極ク痒カリケル事無限シ。然レバ提ニ湯ヲ熱ク涌シテ、折敷ヲ其ノ鼻通ル許ニ窟テ、火ノ氣ニ面ノ熱ク泡ラルレバ、其ノ折敷ノ穴ニ鼻ヲ指シ通シテ、其提ニ指入レテゾ茹。紫色ニ成タル

ヲ、喬様ニ臥シテ、鼻ノ下ニ物ヲカヒテ、人ヲ以踏スレバ、吉ク茹テ引出タレバ、色ハ黒ク、ツブ立タル穴毎ニ、煙ノ様ナル物出ヅ。其レヲ責テ踏メバ、白キ小虫ノ穴毎ニ指出タルヲ、鑷子ヲ以テ抜ケバ、四分許ノ白キ虫ヲ穴毎ヨリゾ拔出ケル。其ノ跡ハ穴ニテ開テナム見エケル。其レヲ亦同ジ湯ニ指入レテサラメキ、湯ニ初ノ如ク茹レバ、鼻糸小サク萎ミ腹テ、例ノ人小キ鼻ニ成ヌ。亦二三日ニ成ヌレバ、痒リテ敷延テ、本ノ如ク二腫テ、大キニ成ヌ。如此クニシツ、腫タル日員ハ多クゾ有ケル。

あくまでこの内供は、「其レガ極ク痒カリケル事無限シ」という身体的な苦痛から、この奇妙な治療を実行していたのである。そうして確かに彼の鼻は「小キ鼻ニ成」つて、どうやら痒みも治まるらしい。しかし「亦二三日ニ成ヌレバ、痒リテ敷延テ、本ノ如ク二腫テ、大キニ成」つてしまうので、再び同じ方法を繰り返すことになる。「如此クニシツ、腫タル日員ハ多クゾ有ケル」とは、まさに『今昔物語集』の内供の鼻が、長短という身体の運動を繰り返していたことを示しており、それは鼻を茹でる以下の治療が奇妙であること以上に、内供にとっても周囲の者にとっても、不思議な身体現象だっただけである。しかし『今昔物語集』の中では、禪珍内供の長鼻もあるいは運動する鼻も、内供を含め誰一人としてそれを異様な出来事とは受け止めていない。物語の末尾で、内供の食事の際の鼻持ち上げ役を買って出た童が、うっかりくしゃみをして鼻の鼻の中に落としてしまった時、内供が「己ハ極カリケル心無シノ乞句カナ。我レニ非シテ止事無キ人ノ御鼻ヲモ持上ムニハ、此ヤセムト為ル。不

覺の白者カナ。立ネ、己」と激怒したことに対し、童が「世二人ノ此ル鼻ツキ有ル人ノ御バコソハ、外ニテハ鼻モ持上メ。嗚呼ノ事被仰ル、御房カナ」と言うのも、内供の迂闊な発言に対する冷静な反発なのであり、語り手が「此レヲ思フニ、実ニ何カナリケル鼻ニカ有ケム、糸奇異カリケル鼻也」と付け加えているコメントも、鼻そのものではなく、それにまつわるこのエピソードへの批評なのである。

では一方で我々は、身体の異常に接して何を思うのだろうか。それについて三浦雅士は、彼がパール・バックの『大地』を読んだ時の衝撃を通して、次のように語っている。

はじめて『大地』を読んだときもつとも衝撃を受けたのは、登場する人間の奇怪さだった。

軍閥になる王虎を助けるのが兎唇とあはたと異様なほど太った豚殺しである。しかも登場人物の多くはその身体的な特徴で呼ばれるのだ。……〈中略〉……

これを不自然というべきだろうか、自然というべきだろうか。明瞭なのは、つい最近まで、人類のほとんどはそういう状態だっただろうということだ。……〈中略〉……

不自然な身体こそが自然だったのだ。

(『身体の零度』平成6・10・講談社)

三浦の衝撃は、決して「登場する人間の奇怪さ」にあるのではない。「不自然な身体こそが自然だったのだ」という発見にこそある。

それは「登場する人間」を、「奇怪」と捉えてしまう自分自身の近代的な視線の自覚でもある。その点では禪珍内供もまた、我々に同じ「衝撃」や自覚を促す身体を持ち主であったとも言える。我々からすれば、当然「不自然」としか言いようのない鼻であるにも拘らず、誰もそれを問題にしなかったということは、つまり彼の身体は誰にとつても「自然だった」ということであり、彼はただ鼻が「極く痒か」ただけなのである。だから語られているエピソードも、「不自然な身体」をモチーフとはしているものの、それ自体が問題というわけではない。禪珍内供ばかりではない。末摘花にしろ艶二郎にしろ、彼らの「不自然な身体こそが自然だったのだ」。

それに対し『鼻』の禪智内供は、全く違った身体への磁場を生きていた。もちろん彼が「鼻を持てあました理由」の一つには、「実際に、鼻の長いのが不便だった」ということがある。それはそうであろう。食事一つを取ってみても、その度ごとに「弟子の一人を膳の向うへ坐らせて、飯を食ふ間中、広さ一寸長さ二尺ばかりの板で、鼻を持上げてゐて貰」わなければならないのだ。いや、そもそもこの鼻は、内供が「沙弥の昔から」長かったというのだから、弟子を持たないその時には、彼は「鼻の先が鈍りの中の飯へとぶいてしまふ」状態のまま飯を食っていたのである。「不便だった」というのは、もつともな感情である。だから、その限りにおいては、『鼻』の禪智内供は『今昔物語集』の内供と同じ身体の磁場を生きていたと言える。

しかし『鼻』の語り手は、「——けれどもこれは内供にとつて、決して鼻を苦に病んだ重^{おも}な理由ではない。」と言つて、禪智内供の生きている身体を、『今昔物語集』のそれから差異化する。そうして内

供が、「実にこの鼻によつて傷けられる自尊心の為に苦しん」でいたことを明らかにするのが、そのような精神の現象は、禪珍内供が生きていたような身体場の磁場、つまり「不自然な身体こそが自然だった」という場からは生まれて来ない。あくまでそれは、「不自然な身体は不自然である」という命題が、自他の中に作り出されることによつて現象する精神のあり様なのだ。しかしそこで「不自然である」と認識してしまうのは、例えば長鼻という「不自然な身体」がその理由ではない。長鼻を「不自然である」と分節化してしまうような「自然な鼻、言い換えれば鞏固に均質化された身体像が必要なのであり、それへの眼差しを通して身体場の「不自然さ」が作り出されていくのである。そしてその「不自然さ」こそが内供にとつての気掛かりとなり、さらにそれが「自分で鼻を気にしていると云ふ事を、人に知られるのが嫌だった」という感情をもたらすことになる。してみると、内供の「自尊心」を傷つけているのは、「この鼻」ではなく自他の中に幻視される「自然な鼻」なのである。

三浦雅士はその問題について、ルイス・マンフォードに拠りながら次のような指摘をしている。

むろん現代人も化粧もすれば衣服も身につける。耳にはピアスをし、髪を切つては熱処理までして加工する。睫にマスカラを付けもすれば、爪を切つてエナメルを塗りもするのである。……へん略……

にもかかわらず、人間の身体とは何かと問われれば、人は一般に「裸で何も塗らず、形を変えず、飾らない人間の身体」である

と答えるだろう。それが現代人の身体についてのイメージであるといつていい。

(前掲書)

三浦はその『身体の零度』において、イデオロギー化された「軍隊」や「体育」が、こうした「身体の規格化」「身体の均質化」を果たしていく過程を丁寧に後述していく。確かに我々は「不自然な身体」を、鍛練と学習によって矯正することで、ある程度科学的な身体になるという、謂わば身体（からだ）の機械化に成功した。そうしてそれは、これからも続いてゆくに違いない。しかし「均質化」であれ「規格化」であれ、結局のところは理念でしかない。とするならば、三浦が「裸で何も塗らず、形を変えず、飾らない人間の身体」のあり様を、「身体（からだ）の零度」と呼んでみた時、まさにそれは「イメージ」だったのであり、そうである以上我々が立ち合っているのは、幻想としての「零度」ではない。しかし近代は、むしろその「零度」にこそ意味を求めて来たのである。ために我々は、身体に纏わりついた様々な意味を剥ぎ取られながら、一方では「零度」がもたらす新たな意味によって、身体が呪縛され、その抑圧に怯え続けなければならなくなったのである。

それを近代文学の問題として考えてみる時、「いわゆる近代文学を創始した作品によって初めて顔への関心が始まったのである。」と、顔という身体への注目によって、坪内逍遙の『当世書生気質』（明治18～19）や二葉亭四迷の『浮雲』（明治20～22・中絶）を捉え直した『身体・この不思議なるものの文学』（昭和59・11・れんが書房新社）

における亀井秀雄の分析が参考になる。^{註8} 例えば亀井は、逍遙がチャンバース百科全書の影響を受けながら「人それぞれに固有な表徴として顔を描くことを主張し」、その実践として『当世書生気質』の中で主人公小町田榮爾に「頬の少しく凹たる塩樑」や「髪に癖ある」特徴を与えて、『神經質の人物らしく。俗に所謂苦勞性』と穿つてみせたところに、逍遙独自の工夫を認める。そして「作者」のこの性質に関する見方は、友人の友芳に受け継がれ、「つぎには小町田自身のなかにそれが甦えつつ自分を責め」、「内省的な自問自答を生」んでゆくというように、「作者」の認識が作中人物自身の自覚に取り込まれて行った」ことを示し、次のように指摘をする。

してみるならば、顔を描くとは、その性質を作中人物自身が自覚的に問題とする始まり、換言すれば、状況の好転に解消できない自己存在の問題を抱え込んでしまうことの予告にほかならない。

逍遙が実現してしまったのは、そのような自意識の問題を軸にプロットが作られてゆく新しい小説だったわけである。

それにしても何故顔を描くことが、その性質を表徴することになっていったのだろうか。おそらくそれは亀井も言うように、『小説神髓』（明治18～19）における坪内逍遙の主張が考えられる。逍遙は作中人物の性質を描く方法の一つとして、「まず人物の性質をばあらハに地の文もて叙しだして之を読者にしらせおくなり」という「西洋の作者」の手法を挙げ、そのためには「まづあらかじめ心理学の

綱領を知り人相骨相の学理をしも会得せざれば叶はぬことなり」と考えた。つまりそこで、「人相骨相」という顔（身体）と、「心理」という性質や内面とが小説作法として結びつき、それまで顔を描くことは、せいぜいその人の外面的な特徴を表していたに過ぎない、言わば「不自然な顔こそが自然だった」時代から、顔という身体が性格や内面といった様々な意味を担ってゆく時代へと移っていたのである。そしてそれを促していたのが、「心理学」あるいは「人相骨相の学理」という〈学〉としてのモデル（規格）であった。しかしそれがモデル（規格）である以上、その「心理」も「人相骨相」も、均質化された幻想であることを免れ得ない。結局小町田が「内省的」に「自問自答」していたのも、彼の身体を通して幻視された「規格」的な内面だったとも言える。ところがそれは、やがて「自己存在の問題」として小町田の中に取り込まれ、いずれ自分自身を蝕んでゆくことになる。

このように自己の具体的な身体が、もう一つ別の幻想的な身体によって脅かされ、今度はそこに精神的な意味を誘い出してしまふ。それが近代文学における身体が始まりであるとするならば、『鼻』の内供は間違いなくその延長線上にある身体の磁場を生きている。だから、『今昔物語集』の禅珍内供と『鼻』の禅智内供とが、同じ「五六寸」の長鼻を持ちながら、禅智内供一人が「自尊心」を「傷つけられる」ことになったのも、彼がそれぞれのテクストに働く身体への力学の差異に、絡め取られてしまったからに他ならない。

*

そのように近代文学の身体が背負った病を生きる者にとって、そこから抜け出る道は、徹底して自己の身体にこだわり、自己の身体と出会うことによって、幻想的な身体像を打ち壊してしまう以外に方法はない。『鼻』の内供にとつてそれを促してくれたのが、あの「もと震旦から渡つて来た男」なのである。

この「医者」であり、「当時は長楽寺の供僧になつてゐた」という男は、「京へ上つた」内供の「弟子の僧」に、「長い鼻を短くする法」を教える。実はそれ以前から、内供は内供で長鼻による「自尊心の毀損を恢復しよう」と、「積極的ににも消極的にも」様々な方法を試みている。特に「積極的に鼻の短くなる方法」については、内供は「殆ど出来るだけの事をした」。例えば「烏瓜くわくわを煎じて飲んで見た」り、「鼠ねずみの尿うりを鼻へなすつて見た事もある」。それらの方法は、当然現代の我々からすれば極めて非科学的なものではあるが、あるいは内供の時代であつても信じるに足るものではなかったのかもしれない。だからこそ逆に、内供の蘊うんをも掴むような心情を理解することが出来るとも言えるのだが、しかしそうした方法自体が、結局はいずれもが失敗に終わつてしまったこととは別に、そもそも本当に「鼻の短くなる方法」だったのだろうか。

と言うのも内供は、『池の尾の寺』に「出入する僧俗の類」の中に、「一人でも自分のやうな鼻のある人間を見つけて、安心をしやうとしたり、『内典外典の中に、自分と同じやうな鼻のある人物を見出して、せめても幾分の心やりにしようと思つた』」のだが、ど

の僧俗にも「鍵鼻はあつても、内供のやうな鼻は一つも見当らな」かつたし、また「どの経文にも」それらしいことは書かれていなかった。ということとは、内供の生きている現在においてもこれまでの歴史上においても、「内供のやうな」「鼻のある人物」は一人として存在していないのである。そうである以上、そもそも「鼻の短くなる方法」自体も、存在してはいなかった。だから内供が試みたという「この方面」の方法も、あくまで類似的な症状について行われていたことを、そのまま、あるいは応用して行つていたに過ぎないのであり、その限りにおいて「何をどうしても、鼻は依然として、五六寸の長さをぶらりと唇の上によぶら下げてゐる」ことになったとしても、それは致し方のないことだったのである。

それに対し「震旦から渡つて来た男」は、はっきりと弟子の僧に「長い鼻を短くする法」（傍点は夢沼）を教えた。ならばこの男は、内供のやうな長鼻を他に知つていたということなのだろうか。無論そのように考えこの男を、内供の身体のある様に対する唯一の理解者と捉えてみることも可能である。しかし「内供のやうな」「鼻のある人物」の存在が確認出来ない以上、この「震旦から渡つて来た男」だけが、特に他の長鼻を知つていたとは考えにくい。そうであるならばこの男は、「長い鼻を短くする法」と言つて、一体何を教えていたのであるうか。

それを考える前に内供にとつての鼻とは、どのような身体であつたのかを明らかにしておく必要がある。

「沙弥の昔から内道場供奉の職に陞つた今日まで、内心では始終この鼻を苦に病んで来た」という内供は、何よりその気持ちに「人

に知られるのが嫌だつた」ため、「日常の談話の中に、鼻と云ふ語が出て来るのを何よりも惧れてゐた」という。それだけに相当鼻を意識していたとも言えるのだが、結局のところ「五十歳を越え」るまでの間、内供が自分の鼻について考えたことと言えば、「積極的」なものであれ「消極的」なものであれ、とにかくこの鼻を短くする方法についてでしかなく、決してその他のことではなかった。

その限りにおいて内供は、何より自分の「顔のまん中からぶら下つてゐる」鼻であるにも拘らず、それを様々な出来事との関わりの中で捉えようとはしなかった。彼にとつて鼻は、ただそれを長い（＝不自然）と認識させるための装置、つまりは自他の中に幻視された（自然な）鼻との関係によつてのみ、生かされていたのである。その意味で内供が、どんなに「始終この鼻を苦しめて来た」としても、彼はそれを自らの身体として生きて来たわけではなかったし、語り手が冒頭で宣言しているように、あくまでそれは、長さ「五六寸」の「云はゞ細長い腸詰めのやうな物」（傍点は夢沼）でしかなかった。要するに、内供の顔に鼻（＝身体）はなかったのである。

さてそこで、あの「震旦から渡つて来た男」が教えてくれた「長い鼻を短くする法」だが、それは「唯、湯で鼻を茹で、その鼻を人に踏ませると云ふ、極めて簡単なものであつた」（傍点は夢沼）。だが実際この方法は、「簡単なもの」などではなかった。これまで内供が試みた「烏瓜を煎じて飲」むということも、なるほどその根や種子が漢方などで用いられるということはあるとしても、長鼻に効くなどとはおよそ信じられてはいなかっただろうし、「鼠の尿を鼻へなす」ということに至つては、かなり抵抗のある治療法だつたに違

いない。しかしいずれもが、一方は飲み薬であり一方は塗り薬であるということからすれば、我々の身体が治療法として受け入れられる範囲を逸脱しているわけではない。ところが「湯で鼻を茹で」、その鼻を人に踏ませる」というのは、それ自体「簡単なもの」ではあつても、明らかに我々の身体にとつて受け入れることの難しい方法である。なかには『今昔物語集』と比較をし、『鼻』では「提が火の上にあるとは出てこない。目の前で沸かすならば、何も湯屋から汲んでくる筈はないであろうから、火にはかけないで、ただ熱い湯に鼻を入れただけなのであろう。時間が経てば自然とぬるくなってくるのである」という気楽な解釈もないわけではないが、ならば弟子の僧が、わざわざ「指も入れないやうな熱い湯を、すぐに提に入れて、湯屋から汲んで」（傍点は夢沼）来る必要はなかったし、「鼻だけはこの熱い湯の中へ浸しても、少しも熱くないのである。」と、語り手が殊更断るまでもなかったはずである。やはりこれは、治療法としての範囲を越えているのである。そのようにおよそ身体が受け入れ難い治療法を勧めるということは、実はこの男が「医者」などではなかったということなのか、あるいは治療の安全性について余程確信していたということになる。しかしテキストによればやはり彼は「医者」であり、また内供以外に長鼻がないことを考えてみれば、この治療法の安全性は確認されてはいないのである。こうした矛盾について考えてみることは、即ちこの男の「医者」としての目論見がどこにあったのかを考えてみることであり、それは取りも直さず、この男の教えた「長い鼻を短くする法」の意味を明らかにすることに繋がるのである。

*

内供は弟子の僧の助けを借りながら、「長い鼻を短くする法」を実践する。

湯は寺の湯屋で、毎日沸かしてゐる。そこで弟子の僧は、指も入れないやうな熱い湯を、すぐに提に入れて、湯屋から汲んで来た。しかしおぢかにこの提へ鼻を入るとなると、湯気に吹かれて顔を火傷する惧がある。そこで折敷へ穴をあけて、それを提の蓋にして、その穴から鼻を湯の中へ入れる事にした。鼻だけはこの熱い湯の中へ浸しても、少しも熱くないのである。しばらくすると弟子の僧が云つた。

——もう茹つた時分のごさう。

内供は苦笑した。これだけ聞いたのでは、誰も鼻の話とは気がつかないだらうと思つたからである。鼻は熱湯に蒸されて、蚤の食つたやうにむづ痒い。

熱湯にじかに鼻を入れると、「湯気に吹かれて顔を火傷する惧がある」というのは、おそらく医者から受けた注意だったのさう。ために内供も弟子も「折敷へ穴をあけて、それを提の蓋にして、その穴から鼻を湯の中へ入れる」という慎重さである。それに対し同じ顔の一部である鼻については、二人ともが全く無頓着であり、鼻を鼻とも思っていないのである。つまりは、内供ばかりか二人ともにとって、その鼻は単なる「物」なのであつて、決して身体として生

きられている鼻ではないのである。だからこそ内供は、このような治療を受けるにあたっては様々な葛藤があつて当然なのだが、何のためらいもなくそれを受け入れてしまふし、弟子の僧も、「もと震旦から渡つて来た男」の教えに、疑問すら持たなかつたのである。それは内供の鼻が、三浦の「不自然な身体」にも及ばない「不自然な物」でしかなかつたからであり、内供に鼻がないというのも、具体的に言えばそのようなこともある。

そのように物化した身体に対し、我々が改めて生きられたそれとして実感する最も手取り早い方法は、激しい痛みや痒みなどといった何か強い刺激を受けることである。しかし内供の場合、「鼻だけはこの熱い湯の中へ浸しても、少しも熱くな」かつたために、そのような自覚を促されることにはならなかつた。ところが内供は、弟子の僧が彼の長鼻を茹でながら、「——もう茹つた時分でごさう。」と言ふのを聞いた時、「これだけ聞いたのでは、誰も鼻の話とは気がつかないだらう」と思い、「苦笑」をする。この「苦笑」は、他者の視点に立つてその見え方を可笑しがつていのではない。弟子の僧の言葉が、内供の鼻についての言説であるにも拘らず、まるで何か（食べ）物でも扱っているような物言ひであり、しかし内供自身もそれをそのように受け入れ、これだけ聞いたのでは、誰も鼻の話とは気がつかないだらう」と思つてしまふ。要するに内供は、弟子の僧の言葉によつて、自分で自分の鼻のことを「物」のように思つてしまつていたことに気づかされたわけで、そのような自分の思い方そのものが可笑しかつたのである。そしてそれは「苦笑」であつたという意味で、明らかに内供の、そうした自分自身への批判

を動機としていたのである。しかも彼の鼻は、「火傷」はしなかつたものの、「熱湯に蒸されて、蚤の食つたやうにむづ痒」くなり、却つてその感覚が、自分の身体としての鼻を意識させることになる。一方治療は、「その鼻を人に踏ませると云ふ」次の段階へと進む。

弟子の僧は、内供が折敷の穴から鼻をぬくと、そのまだ湯気の立つてゐる鼻を、両足に力を入れながら、踏みはじめた。内供は横になつて、鼻を床板の上へのばしながら、弟子の僧の足が上下に動くのを眼の前に見てゐるのである。弟子の僧は、時々気の毒さうな顔をして、内供の禿げ頭を見下しながら、こんな事を云つた。

——痛うはござらぬかな。医師は責めて踏めと申したで。ぢやが、痛うはござらぬかな。

内供は、首を振つて、痛くないと云ふ意味を示さうとした。所が鼻を踏まれてゐるので思ふやうに首が動かない。そこで、上眼を使つて、弟子の僧の足に輝^{あざ}のきれてゐるのを眺めながら、腹を立てたやうな声で

——痛うはないて。

と答えた。実際鼻はむづ痒い所を踏まれるので、痛いよりも却て気もちのいゝ位だつたのである。

この場面、内供と弟子の僧とは、通常の二人の関係を逆転させてしまつてゐる。二人は何とか日常的な場を仮構しようと、弟子の僧は「氣の毒そうな顔」（傍点は夢沼）をしてみせ、内供は内供で「腹

を立てたやうな声」(傍点は夢沼を出してみせたりする。しかしそのうした演技こそが、本来ならば逆に内供を傷つけてゆくことになるのであるが、とまれ鼻が短くなることを願う内供にとっては、それほどばかりか自分の惨めな姿態も、弟子の僧の「輝のされてゐる」足も、さほど気にはならなかったのである。いやむしろそれは、内供が、踏まれて痛いはずの鼻が「實際鼻はむづ痒い所を踏まれるので、痛いよりも却て気もちのいゝ位だった」というような、鼻のもたらす身体的な快感に支配されていたからと言ふべきであらう。そしてさらに内供の鼻は、「しばらく踏んでみると、やがて、粟粒のやうなものが、鼻へ出来はじめ」、それを「鐻子」で抜いた後、再び茹でられることになる。

——之を鐻子でぬけと申す事でござつた。

内供は、不足らしく頬をふくらせて、黙つて弟子の僧のするなりに任せて置いた。勿論弟子の僧の親切がわからない訳ではない。それは分つても、自分の鼻をまるで物品のやうに取扱ふのが、不愉快に思はれたからである。

……〈中略〉……

やがて之が一通りすむと、弟子の僧は、ほつと一息ついたやうな顔をして、

——もう一度、之を茹でようござる。

と云つた。
内供は矢張、八の字をよせたまゝ、不服らしい顔をして、弟子の僧の云ふなりになつてゐた。

弟子の僧の、「——之を鐻子でぬけと申す事でござつた。」も「——もう一度、之を茹でようござる。」も、最初に鼻を茹でた時の「——もう茹つた時分でござらう。」と同じ、内供の鼻を〈物〉と見做した物言ひである。その時には内供も同じように思い、弟子の僧の言葉を受け入れはしていたが、そこでの自分への自嘲的な批判や、「むづ痒い」鼻あるいは「気もちのいゝ」鼻を通して了解されてゆく身体としての鼻への意識が、今度は弟子の僧の言葉と葛藤を始めるのである。「弟子の僧の親切」と、「自分の鼻をまるで物品のやうに取扱」われることの「不愉快」と。しかし内供は、「粟粒のやうなもの」を「鐻子」で抜かれる時も、「もう一度」鼻を茹でられる時も、「不足らしく頬をふくらせ」たり、額に「八の字をよせ」たりはしてゐるものの、畢竟「黙つて弟子の僧の」「云ふなりになつてゐた」のである。

*

いつその時、内供はそうした「不愉快」感にこだわらず、〈不自然な〉鼻を作り出してきた幻想としての身体を、そのまま打ち砕いてしまふはよかつた。しかしながら彼は、「二度目に茹でた鼻を出して見」た時、その鼻が「あたりまへの鍵鼻」程度に短くなつていたことによつて、結局はそれに「満足」をしてしまつた。内供は再び、〈不自然な身体は不自然である〉という命題の中を生きることになる。

かうなれば、もう誰も晒ふものはないのにちがひない。——鏡の中にある内供の顔は、鏡の外にある内供の顔を見て、満足さうに眼

をしばたゝいた。

何かのこだわりがなければ、鏡の外にある内供の顔は、鏡の中にある内供の顔を見て、満足さうに眼をしばたゝいた。と語られるところであろう。その場合、鏡の外にある内供と鏡の中にある内供との関係を考えてみるとするなら、菅孝行の次のような指摘が有効である。

『眼と精神』で、メルロオ＝ポンティがみごとに描いたように、身体は、自己のパスpekティヴを離れて自由にとびまわることとはできないのである。眼で見ようとすれば、「私の眼の視角からしか見ることはできないし、決して見ている眼を見ることはできない。それができるのは、鏡に映った己の姿を通じてだけであり、そのようにして対象化される私の身体は、いうまでもなく私の身体そのものではない。それは、鏡を媒介として、意識の中につくられる抽象化された像としての私の身体であって、決して、視覚に直接与えられる対象ではない。

（『関係としての身体』昭和56・3・れんが書房新社）

我々は、鏡の中にある短くなった内供の鼻は、鏡の外にある短くなった内供の鼻を対象化していると考え、ほとんどそれを等質的なものと捉えている。しかしそれは、あくまで「鏡を媒介として、意識の中につくられる抽象化された像」なのであって、正確には内供の「身体そのものではない」。だからもし、鏡の外にある内供の

顔は、鏡の中にある内供の顔を見て……。と語られた場合、それは内供の具体的な「身体そのもの」から感受される「満足」を、直接表現していることにはならないのである。一方そのような視点から考えてみる時、『鼻』において語られている「鏡の外にある内供の顔」とは、確かに内供の「満足」の根拠として「視覚に直接与えられるべき身体ではある。ところがそれを眼差し、「満足さうに眼をしばたゝい」ているのは、「鏡の中の内供の顔」であり、具体的な内供の「身体そのもの」ではない。言わばそれは虚構の内供なのであって、その「満足」もまた虚構の「満足」なのである。つまりはどのように表現をしてみても、「鏡の中」に自分の姿を映し出して見る限り、内供は己の鼻の身体的な「満足」を感受することは出来ないのである。もしも彼がそのような「満足」を得るとしたなら、それは「鏡を媒介」としてではなく、短くなった鼻によって生じる自身の身体的な現象を通してなのである。

だからであろう。内供の「満足」が、虚構のそれではないことを露呈するかのうちに、彼は「意外な事実を発見」し、それに思い悩むことになる。

所が二三日たつ中に、内供は意外な事実を発見した。それは折から、用事があつて、池の尾の寺を訪れた侍が、前よりも一層可笑しさな顔をして、話も碌々せず、、ぢろぢろ内供の鼻ばかり眺めてゐた事である。そのみならず、嘗、内供の鼻を粥の中へ落した事のある中童子などは、講堂の外で内供と行きちがつた時に、始めは、下を向いて可笑しさをこらへてゐたが、とうとうこ

らへ兼ねたと見えて、一度にふつと吹き出してしまった。用を云ひつかつた下法師たちが、面と向かつてゐる間だけは、慎んで聞いてゐても、内供が後さへ向けば、すぐにくすくす笑ひ出したのは、一度や二度の事ではない。

内供は始、之を自分の顔がはりがしたせいだと解釈した。しかしどうもこの解釈だけでは十分に説明がつかないやうである。

——勿論、中童子や下法師が晒ふ原因は、そこにあるのにちがひない。けれども同じ晒ふにしても、鼻の長かつた昔とは、晒ふのにことなく容子がちがふ。見慣れた長い鼻より、見慣れない短い鼻の方が滑稽に見える云へば、それまでである。が、そこにはまだ何かあるらしい。

鼻が短くなつたにも拘らず、一体どうしてこんな嫌味な笑い方をされなければならないのか、理不尽とも言える周囲の態度について、およそ理由の飲み込めない内供は、「鼻の長かつた四五日前を憶ひ出して」は「ふさぎこんでしまふ」ことになる。しかも内供には、そうした「池の尾の僧俗」たちの笑いを「傍觀者の利己主義」として理解するだけの「明が欠けて」はいたものの、「それとなく感づいてはいたため、「何となく不快に思」い、「日毎に機嫌が悪く」なつていくのである。おそろくそこには、そうした不透明感に対する苛立ちもあつたのだらうが、いずれにせよ内供は、そういう時の自分の言動を振り返つてみることで、「なまじひに、鼻の短くなつたのが、反て恨めしく」なるのであつた。

このように整理してみると、内供のこうした後悔は、「池の尾の

僧俗の態度」、つまり彼らの「傍觀者の利己主義」が原因だったとも言えるのだが、実はそこにはもつと別な理由が存在していた。

——前にはあのやうにつけつけとは晒はなんだて。

内供は、誦しかけた經文をやめて、禿げ頭を傾けながら、時々かう呟く事があつた。愛すべき内供は、さう云ふ時になると、必ずぼんやり、傍にかけた普賢の画像を眺めながら、鼻の長かつた四五日前の事を憶ひ出して、「今はむげにいやしくなりさがれる人の、さかえたる昔をしのぶがごとく」ふさぎこんでしまふのである。——内供には、遺憾ながらこの問に答を与へる明が欠けてゐた。

内供がここで「ぼんやり」と「眺め」ていた「普賢の画像」とは、六牙の白象に乗つて合掌をする普賢菩薩のそれである。その普賢菩薩は、分けても法華經信者にとっては、護持者として篤い信仰を集めていたのだが、内供が鼻の短くなつた翌朝、「鼻は依然として短い」ことを確認し、「法華經書写の功を積んだ時のやうな、のびのびした気分」になつていたことを考えると、彼もまた普賢菩薩を篤く信仰していた一人だつたと言える。とするならば、これまでこの画像に注がれてきた内供の眼差しは、いつでも普賢菩薩に焦点化されていたはずである。ところがよくにして短くなつた鼻を、訊知らず「つけつけと」笑われ、それに思い悩む内供にとって、眼前の「普賢の画像」は、これまでのそれではなかった。内供はいつも通りその画像を眺めてはいるものの、決して彼の視線は普賢菩薩に向けられ

てはいなかった。むしろ普賢菩薩の乗った白象に、しかもその長鼻をこそ見ていたのである。

もともと彼がそれを「眺め」ながら、「鼻の長かつた四五日前の事を憶ひ出して、『今はむげにいやしくなりさがれる人の、さかえたる昔をしのぶがごとく』ふさぎこんでしまふ」ことを考えると、内供が本当に見ていたものは、白象の長鼻に二重写しにされた、「四五日前」までの彼自身の長鼻であつたと言える。そしてそれは、曾て彼が「長い鼻を実際以上に短く見せ」ようと、「鏡へ向つて、いろいろ／＼な角度から顔を映しながら」見た鼻や、三四日前「長い鼻を短くする法」を行つた際、その効果を確認しようと、「弟子の僧の出してくる鏡を、極りが悪るさうにおつおつ覗いて見た」時の鼻とは、明らかに違う。再び菅の指摘に戻るならば、それらの鼻は「鏡を媒介として、意識の中につくられる抽象化された像」であつて、内供の「身体そのものではない」。しかし今、内供がたとえ「ぼんやり」とではあつても眼差しているのは、自己の身体を経験を媒介として捉えた、まさに彼の具体的な身体なのである。その点で内供は、初めて自分の鼻を見たのであり、自分の鼻という身体に初めて出会つたのである。

ところがその長鼻は、既に内供の「顔のまん中」に「ぶら下つて」はいないのである。その限りにおいて内供が出会つた身体は、残像としてのそれではなかつた。だから内供が、「なまじひに、鼻の短くなつたのが、反て恨めしくなつた」というのも、そうした意味での後悔をも含んだ感情だつたのである。

どうしたことかそれが、ある朝再び元の長鼻に戻つてしまうので

ある。

*

翌朝、内供が何時ものやうに早く眼をさまして見ると、寺内の銀杏や櫟が一晚の中に葉を落としたので、庭は黄金を敷いたやうに明い。塔の屋根には霜が下りてゐるせいであらう。まだうすい朝日に、九輪がまばゆく光つてゐる。禅智内供は、蓐を上げた椽に立つて、深く息をすひこんだ。

殆、忘れようとしてゐた或感覚が、再内供に帰つて来たのはこの時である。

内供は慌てゝ鼻へ手をやつた。手にさはるものは、昨夜の短い鼻ではない。上唇の上から頤の下まで、五六寸あまりもぶら下つてゐる、昔の長い鼻である。内供は鼻が一夜の中に、又元の通り長くなつたのを知つた。さうしてそれと同時に、鼻が短くなつた時と同じやうな、はればれした心もちが、どこからともなく帰つて来るのを感じた。

——かうなれば、もう誰も晒ふものはないにちがひない。

内供は心の中であう自分に囁いた。長い鼻をあげ方の秋風にぶらつかせながら。

内供が「慌てゝ鼻へ手をやつた」のは、彼が「蓐を上げた椽に立つて、深く息をすひこんだ」時、「殆、忘れようとしてゐた或感覚が、再内供に帰つて来た」からである。この場面を映像化してみれば分かることだが、内供の鼻は、目覚めた時からとつくに長くなつてい

たのであり、だから内供が「深く息をすひこんだ」時、その晩秋早朝の冷気は、既に「顚の下」「五六寸あまり」のところにあった二つの鼻孔から取り込まれ、たちまちその長さを駆け上がつていき、鼻腔の奥まで到達したのである。「殆、忘れようとしてゐた或感覚」とは、まさにその時内供の身体が捉えた「感覚」なのであり、それは同時に、内供の鼻が長かった時の、その重さやバランス等をも蘇らせ、彼を「慌て」させたのである。

とは言つても内供は、むしろこれまでその「感覚」をこそ抑圧して来たのであつた。だから「殆、忘れようとしてゐた或感覚が、再内供に帰つて来た」というのは、彼の中での単なる「感覚」の再現ではなく、抑圧されて来た身体の「感覚」が覚醒され、具体的な生きる身体へと解放されていく瞬間を、語っているのである。

その意味でこの長鼻は、形も大きさも「元の通り」ではあつても、当然「昔の長い鼻」ではなかつた。言つてみれば、内供が初めて直接出会つた身体としての鼻であり、いづれはそれが自分の全身体との出会いを喚起し、結果幻想的な身体像をも打ち壊してゆく可能性を秘めた鼻なのである。

その点でこの場面は、精神の病を背負つた身体を描き続けてきた日本近代文学の歴史の中にあつて、最も感動的な光景¹¹と言える。

ところがそれを、相変わらずの心情論へと結び付け、即ち「明るい」鼻論が展開されるわけだが、野口三千三の身体論（『原初生命体としての人間』・昭和47・9・三笠書房）に従うならば、内供がこうして出会つた身体を、本当に「隨意化（コントロール）」するために「その「感覚や能力を」「言語化することが」「何より先に求めら

れるのである。にも拘らず内供は、この出会いについて「殆、忘れようとしてゐた感覚」や「鼻が短くなつ時と同じやうな、はればれした心もち」を甦らせ、「——かうなれば、もう誰も晒ふものはないにちがひない。」と「心の中で」「自分に囁く」ことになるのである。明らかに内供は、自分の鼻が長い／短いかという問題を生きていた時の言説に立ち戻つてしまつたのであり、つまりそれは内供にとつて、「からだの中身の変化の感覚」について、「折角つかみかけたものも、それに似ているすでに言語化されて強いエネルギーをもつたものに、くつついてわからなくなつてしまつていゝ」といふことなのである。その意味で内供の身体は、「他人の目から」^{註11}というよりも、自分自身の眼差しからすら「解放」されてはいないのである。

だからであらう。逆にそのことを批判的に捉えることによって、内供の「——かうなれば、もう誰も晒ふものはないにちがひない。」という「囁」きも、「はればれとした心もち」も、「明らかに錯覚」^{註12}ということになる。そして遡ればそこに、吉田精一が「自己を把握することが弱く、他人の目にうつる自分の姿に始終注意をひかれるばかりで、自己を絶対的に生かし得ない鼻長の内供」^{註13}を読み取ろうとしたことに始まる、一連の「暗い」鼻論が成立する。しかし内供が自分の身体と出合い、「からだの中身の変化の感覚」を「つかみかけた」ということは、少なくとも「錯覚」などではなかつた。それがこうして否定的に捉えられてしまうのは、まさにその「感覚」に対する禅智内供の、「言語化への努力の怠慢からくる、ことばの貧困」のせいなのである。そしてそれ自体が、我々の「からだの感覚の不毛・貧困」の戯画^{註14}となつていたのであつて、決してそこに「内供の

あ・わ・れがあり、ふしぎなベ・ー・ス・がにじ^{註14} んでいるというわけではないのである。

さて最後に、「長い鼻を短くする法」を教えた男についてだが、結果から言えば内供は「火傷」もしなかったし、一旦は長鼻も短くなった。その点ではこの男の治療法は、正しかったということにもなるのだが、しかしある朝内供の鼻は、「又元の通り長くなつてしまったのである。してみるとこの男は、「医者」としては些かヤブだったのかもしれない。もつともこの男の教える治療法が、本当に安全で、しかも再び内供の鼻が長くなることをまでも踏まえているとしたならば、事情は全く違ってくる。その場合この男の目論見は、長鼻を短くすることではなく、長鼻という〈不自然な身体〉によって「自尊心」が「傷けられ」、ために鼻なしとなつてしまった患者に対して、自分の鼻、自分の身体と出会わせることによつて、「自尊心の毀損を恢復」させようとしていたのである。

しかしまた、こうも言える。内供の鼻が「火傷」をしなかったことも、あるいは「あたりまへの鍵鼻」となったことも、実は全くの偶然であつて、そもそもこの男は、自分の指示通りの治療法が実行されることなど、あり得ないと考えていたのかもしれない。だからと言つてこの男が、必ずしもニセ医者だったということにはならないだろう。と言うのも、「指も入れないやうな熱い湯」で「鼻を如て、その鼻を人に踏ませる」という治療法は、いざそれをやってみようと思つても、必ず直前になつて、自分の鼻にそんなことは出来ないとなじろぐであらうし、もしもその湯に鼻をつけるまでの意志を持つていたとしても、今度は身体の拒絶反応がその意志を上回つて

しまはずである。そうしてその時の熱さが、自分・の・鼻・を自覚させてくれるのである。つまりいずれの場合もが内供に対し、自分の鼻・身体との出会いを促すこととなり、それによつて男は、「毀損した内供の「自尊心」の治療を試みていたと言えるのである。このように考えてみると、少なくとも男がしようとしていたことは、所謂外科的な処置ではなかった。とするとこの男は、「長い鼻を短くする法」と言いながら、むしろ内供の内面を捉え、それをこそ治療しようとした精神療法士であつたと言えるのではないか。

確かに禅智内供は、禅珍内供や末摘花、あるいは仇屋艶二郎と同じ身体の〈不自然さ〉を生きていながら、一人彼だけが、それを精神の病として抱え込んでしまつたのであり、だからこそ彼には、精神療法士が必要だつたのである。

しかしだからと言つて「鼻」を、心理描写の巧みな小説とだけ捉えてしまつたなら、これまで見てきたやうな優れて身体的な問題を扱つたテキストであることの可能性は、全く閉ざされてしまうことになる、それこそテキストにとっては「たまらない」ということになるのである。

註1、『宇治拾遺物語』にも同類の話があるが、馬淵一夫の論（『今昔物語集』と芥川龍之介・『解釈と鑑賞』至文堂・昭和41・11）に従い、芥川は『今昔物語集』を主な材料としていたものと考え、こちらを参考テキストとする。尚、引用は『今昔物語集 四』（日本古典文学全集24・昭和51・3・小学館）により、ルビは適宜省略した。

註2、『今昔物語集』における表題では「禪珍」で、その本文は「禪智」。芥川の「鼻」では「禪智」。この論では、『今昔物語集』の内供を「禪珍内供」、「鼻」の内供を「禪智内供」と書き分けることにする。尚、「宇治拾遺物語」では「善珍」と表記されている。

註3、『今昔物語集 四』（註1前掲書）「池尾禪珍内供鼻語第二十」解説

註4、海老井英次『芥川龍之介Ⅰ』「解題二「鼻」」（近代文学注釈叢書14・平成2・8・有精堂）

註5、『芥川龍之介 実像と虚像』（昭和63・11・洋々社）

註6、それについては、田中実『芥川文学研究ノート③「鼻」と「龍」』（平成6・3・都留文科大研究紀要 40号）に詳しく整理されている。

註7、友田悦生は、このテキストが「それを疑ってしまえば物語自体が作動しなくなるような前提」として、『異常な鼻は滑稽である』という認定を挙げ、それをこの物語の「超越論的地平」と捉えているが、拙論においては、「異常な鼻」（不自然な身体）を「滑稽である」（不自然である）と認識してしまうような身体の磁場を問題としている。

註8、亀井の論考に触れたものとして、篠崎美生子「『鼻』——原典の後日譚として——」（平成6・2・『早稲田大学大学院文学研究科紀要別冊（文学・芸術）』20号）がある。

註9、奥野政元『芥川龍之介論』（平成5・9・翰林書房）

註10、『曼荼羅と来迎図 平安の絵画・工芸Ⅰ』「図版解説」（日本美

術全集7・平成3・6・講談社）

註11、関口安義は、「他人の目からの解放」を獲得した主人公のすがすがしい姿を、結末に認め、それを「暗い「鼻」評」からの離陸、内供の主体性回復物語という〈読み〉の誕生である」として、「明るい「鼻」の読み」を主張している。（註5前掲書）

註12、三好行雄「『芋粥』の構造——芥川龍之介の一章」（昭和46・2・『国語国文学論究』第二号）

註13、吉田精一「鼻（隣接諸学を総合した新しいアプローチ）三」（昭和42・1・『国文学 解釈と鑑賞』・至文堂）

註14、註13前掲書

尚、「鼻」についてのテキストは、『芥川龍之介全集 第一巻』（平成7・11・岩波書店）を使用し、適宜ルビは省略した。

（たてぬま まさみ・苫小牧高専助教授）